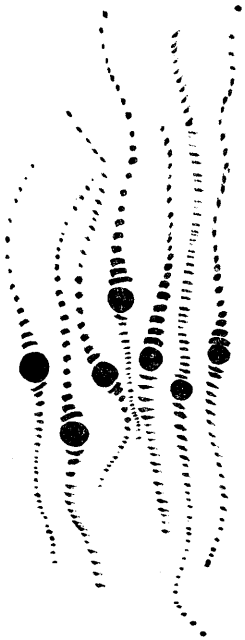
保育の実践と理論を求めて

――インドの旅(2)――

津守　真



多様な生活

近代的な石油コンビナート工場のゲストハウスに泊っていた私共は、会議の行われたバドーラ大学のキャンパスまで、三〇分以上も大学のバスに乗る。農村地帯を通り抜ける途中、汽車の踏切で長い時間待っていると、窓際に駱駝の顔がのぞく。牛やろばや人のひく荷車が列をつくる。道の傍の井戸に、女たちが頭に金属の壺をのせて水を汲む順番を待っている。はだしの女の子が、土で囲んだ低い住居の中から、金属の小さな壺を頭にのせて、水を汲みに出てくるのが見える。何人かの子どもたちは、腕に赤ん坊をかかえている。井戸のまわりには、次第に人々が集まってくる。その風景をみていると、創世記に出てくる井戸端のレベカの姿、ヤコブとラケルの生活も、こんな風だったのではなかろうかと、古代へと

思いはとぶ。文明の発祥地から遠くないこの地で、人々はずっと昔からいまに至るまで、同じ生活スタイルをつづけているようにみえる。しかし、ここは石油コンビナート工場に遠くない、大型トラックがひっきりなしに通る道路の傍である。

バローダ市は、マハラージャ王の宮殿のある古い町である。バローダ大学は、マハラージャ・サヤジラオ王によって創設され、現在は政府の援助によって運営されている、インドでも有数の大学である。そのマハラージャ王の孫娘が、この家政学部児童学科の学生で、一晩、いまは博物館になっているその王宮に案内してくれた。色の白い西欧風の美女である孫娘は、ムガール王朝の細密画を思わせる。バルコニーの欄干から見る、耶子の葉蔭に夕暮の迫る景色は、インドに来たことを自覚させる。博物館には、日本から来たという桜の花模様の大きな伊万里焼の花瓶も並べられている。一九世紀の末頃のことと思うが日本から遙々とだれがここに訪れたのだろうか。

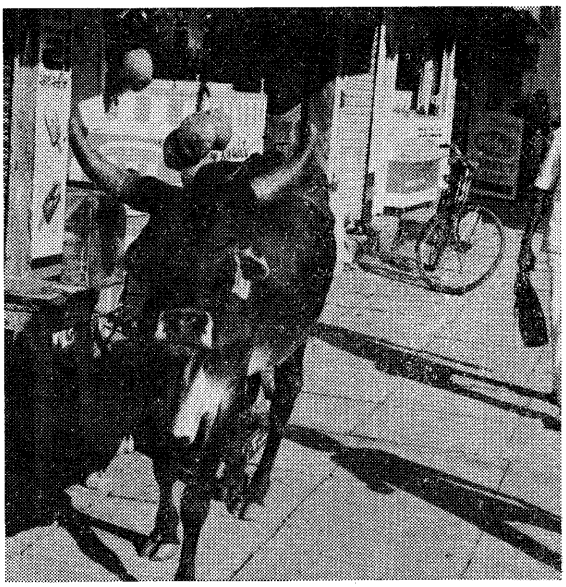


写真 1

バローダ大学の家政学部の教授たちは、その多くが米国の大学で学び、学位をとった人たちである。だから、幼児教育および児童発達の専門分野でも、米国の学問が

強く影響している。しかし、外国の専門書は非常に高価なので、裕福な家庭の子女の多いこの大学でも、自分で書物を買うことは殆んど不可能なのだという。大学の図書館でごく限られた書物から学ぶ。そのせいもあるのか、考え方が実際的で、現実から学んでいることが多いように思われた。私が話した何人もの大学院生は、修士論文を終えたら米国の大学にゆきたいと希望をのべた。

会議も終りに近づいた頃、ひとりの学生に案内され、リキシャにのって銀行にゆき、帰途、古い市街地を案内してくれた。王朝時代に建てられたインド風の三つの門をくぐり、スルサガル湖のわきの埃っぽい街路を歩いたときには、十一月の末とはいえ、真夏のような暑さに疲れた。百年以上も前に建ったような立ち並ぶ家々は、よくみればインド風のデザインの露台がみえるが、塗り直されることもなく、どれも半分傾いている。街中が香辛料と亜硫酸ガスの臭いに黄色くかすんでいる。小さな露店が並ぶ雑踏の中をリキシャが警笛を鳴らして走り、水牛、牛、ろば、山羊が徘徊する。(写真1) その喧騒

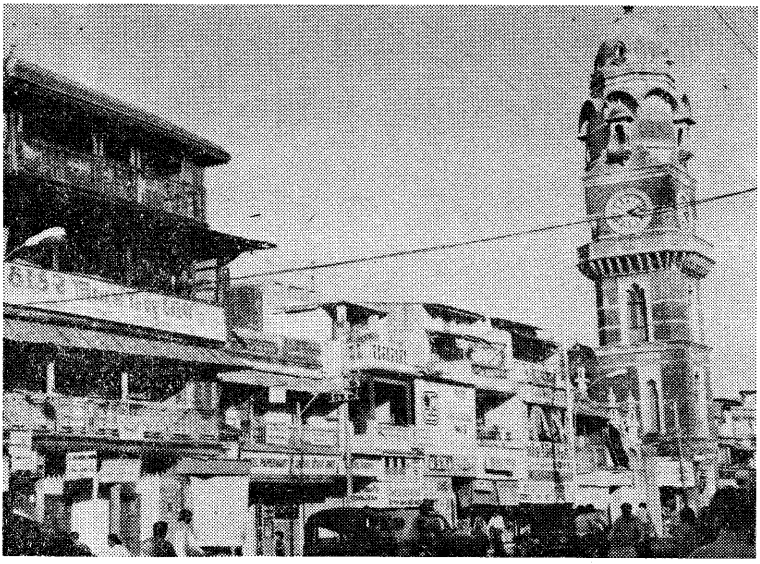


写真 2

の中に、ヒンズー教の小さな祭壇がある。（写真2）ここでも、どこまでが古代で、どこから現代なのか区別がつかないのだが、水牛や牛が人間と顔を並べて歩き、だれも不思議に思わない生活の仕方は、日本でも西欧でも、ずっと以前に失った部分である。旧約聖書にいう「おおかみは小羊と共にやどり、牛の子と熊の子と共に伏し」というのは、われわれが考えるような観念的な理想ではなく、現実を描写したのではないかとすら思われた。

この学生の両親の家は、その古い街の露路の奥にあった。日中でも薄暗い納屋のような入口をはいり、はしごを上った二階が住居だった。ベッドに母親が坐っていた。薄暗い室内を涼しい風が吹き抜ける。娘がひとりではしゃぎ、紅茶を運び、カレーで揚げた豚肉の皿を持ってくる。大学での夕食の定刻が近づいているので気が気でなく、帰ろうとすると娘は無理にひきとめる。ようやく辞して梯子をおりると、鉄道で働いている父親が帰ってきたところだった。入口の暗闇から笑顔を見せて、私に手を差しのべた。ホテルや大学で、無表情な召使の男達に慣れていた私には、この父親の口元の白い歯が印象的だった。もう一度部屋にもどるようにとの懇請を断って再びリキシャで大学にもどり、この日の貴重な冒険を終えた。この学生も、大学で学びながら、卒業後、教職にはつけないカーストに属する。

E・H・エリクソンは、晩年の著作、「ガンヂーの真理」ととり組んでいるとき、ガンヂーの生地、アーメダバードに滞在していた。それはバローダから一〇〇キロほどの町で、同じグジュラート州に属する。エリクソンはインドの町を次のように描写している。

「街には騒音があふれています。それは汽車の汽笛、サイレン、きしみ、轟きなどの音です。もっと近くてうるさいのは自転車、タクシー、自動車が短い間隔で絶え間なく警笛を鳴らす音です。……一団の山羊たちの鳴き声、時として起こるロバの鳴き声、畜牛のモーという鳴き声、馬の群が素早く飛び去る時のヒュッヒュッという風を切る音、これらの音が人々の労働の音の背景となっ

て静かに聞えて来ます。人々が互いに呼び交う声や、小さな砂糖菓子や香ばしく焼けた食べものや木の実を積んだ昔ながらの二輪の食糧馬車がチリンチリンと鈴の音を立てているのが聞えます。……」（コールズ、鑪幹八郎訳『エリク・H・エリクソンの研究』ぺりかん社 p.343）

このような背景のもと、カースト制の中で育つインドの若者の発達にまでエリクソンの思索は及ぶ。私はまだそこにまで考えをひろげることができないでいるが、インドの子どもが大人になってゆく発達の過程は、日本人とも西欧人とも異るのだろうと思う。その相異点は何か、共通点は何なのか、幼児期の保育にそれはどのように反映してゆくのか、今後の課題である。

ボンベイの近代的幼稚園

会議の間に、私は哲人風の年輩の婦人指導者の何人かに出会った。その中のひとりである首都ニューデリーの教育指導主事である人に、私は帰途ボンベイに二日間滞在することを話すと、ぜひ紹介したい幼稚園があるとい

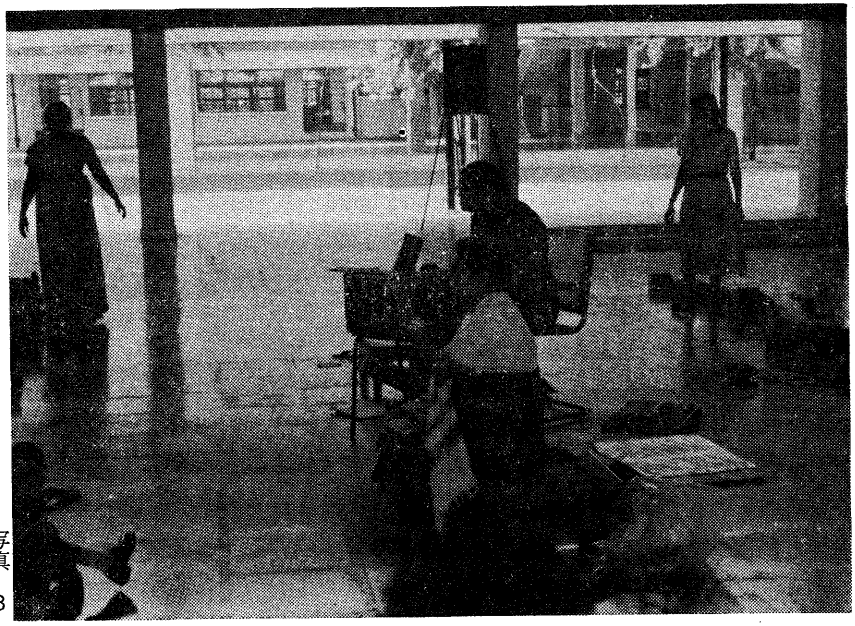


写真 3

う。この同じ会議に出席していたシリン・チョクシー女史の幼稚園である。

ボンベイの市街地をいくつも通り過ぎ、例によってはだしの貧しい人々の群れる傍をタクシーで通りすぎてゆく。一時間ほど走った郊外で、ヴィリロリーのウダイチャル学校というと、タクシーの運転手は、それはスーパーモダンな学校だといった。家具製作会社のゴドレイ・ボイス・カンパニーの経営する小学校と幼稚園である。先代の社長が保育熱心で、従業員の子どもたちの教育のために創立したのだという。広々した土地に、いかにも南国風の風通しのよい石造りの建物である。（写真3）中央の講堂には側壁がほとんどなく、芝生をへだてた両側に、小学校と幼稚園の建物が並んでいる。石畳の渡り廊下が広々としていて、屋根の下に入ると、涼しい風が通りぬける。男の子も女の子も、ピンクの格子縞の制服を着ている。ここでは出身のカーストが分らないように制服にしてあるのだという。

私が到着したときは、一列に並んだ子どもたちが、手

写真 4

を後に組んで、部屋から部屋へと移動するところだった。（写真4）最初の部屋は製作の部屋といわれたが、かなり広い部屋にいくつかのコーナーがあり、部屋に入ると子どもたちは好きなコーナーを選んで何かをやりはじめる。三角形に紙を切ってクリスマスツリーのように貼り合わせる子どもたち、ゴム版を押してクレヨンで色をぬる子どもたち、画架で絵の具を使う子どもたち。（写真5）最初の形は先生に与えられているが、それをどのようにつづけてゆくかは子どもの自由に任されている。私もひとつの机のわきに腰を下してのりをつけていると、同じ机の子どもたちの顔がさっと輝やく。（写真6）わずかの時間だったけれども、私はインドの子どもたちがいきいきと明るく活動する姿に接して嬉しかった。先生たちも静かで、子どもたちの活動を助けようとしている様子がうかがえた。

一つのクラスの子どもたちは約二〇人で、十七クラスある大きな幼稚園である。三〇分きっかりで子どもは集められて、次の部屋に移動する。絵本を見る部屋、数の

写真5

教材のおいてある部屋などがある。九時から十二時半までが午前のクラスだから、ひとつのクラスの子どもは、六つの部屋と戸外遊びをすることになる。一時に中級のクラスの子どもたちがきて、四時半までつづく、二部制である。

みんなが先生を囲んで絵本を見ている部屋で、ひとりの女の子が反対側の柱によりかかっているので、私は皆の中に入らない子どもがいるのは自然なことだと、ミス・チョクシーに話すと、あの子は何かの理由で怒っているのだと思うといってその子を呼んだ。女の子はすぐに立上ってきて、笑いをみせ、またもとの柱のところにもどった。この学校では、この州の言語であるマラティ語、隣州の言語であるグジュラート語と、それから英語の三つの言語が用いられている。この子どもにはマラティ語で話したのだと、ミス・チョクシーは言った。

ひとつの大きな部屋では、マラティ語のクラスと英語のクラスとがまざって、ごっこ遊びをしていた。調理セットの並んだコーナーでは、数人の子どもがままごとの

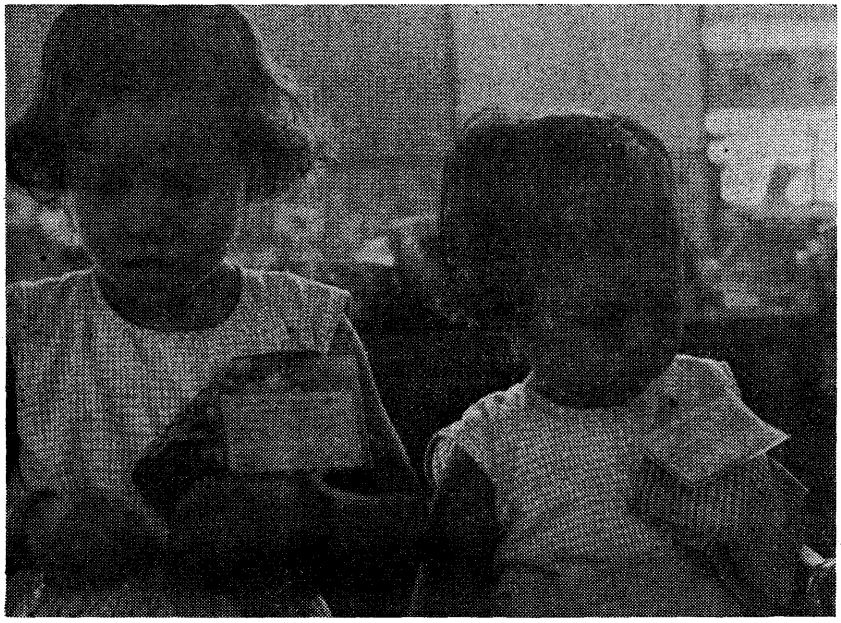


写真 6

御馳走を作っていた。もうひとつのコーナーでは、つみきを並べてベッドを作り、ねたり起きたりして遊ぶ子どもたち、また卓子をかこんでレストランごっこをしている子どもなどがいた。その中に腰を下していると、次第に私のところに御馳走をもってくる子どもたちも現われてきた。いつも日本の幼稚園でやるように応答していると、私もたのしくなる。丁度そうなったころ、三〇分がきて、子どもたちは手を後に組んで次の部屋へと移ってゆく。

午後の部の子どもたちは一時に到着すると、樹木のある広い庭にめいめい散らばって、遊具を自由に使って遊ぶ。このときの子どもたちの表情は日本の幼稚園の子どもたちとよく似て、幸せそうである。ここにくる子どもたちの中にも、道路のわきで見る極貧の子どもたちも含まれているという。いまはこの会社の従業員として雇われているのだから事情は違うのだろうが、それでも、入園当初は、清潔にすることだけでも大変な仕事なのだという。はだしで無表情に立っていた子どもたちが、このように笑うようになったのだとしたら、この幼稚園の力は偉大である。それにしても、道端には、ほとんど洋服も着ていない子どもたちが溢れており、幼稚園の数はあまりに少ない。

この学校は、二十年以上前に創立されたが、以前は小学校のように、文字と数のドリルをしていたという。ミス・チョクシーが十五年前にバローダ大学の児童学科を卒業してここに赴任してから、机をとり払って床を用いるようにし、遊ぶことの重要性を説き、ここまでインフォーマルにしたのだと、彼女は誇らしげに語った。それには非常に時間がかかったが、いまは親たちも認めているし、学校の中でも理解されているという。私どもからみるならば、三〇分毎に部屋を移動するのでは、十分に遊びきることはできないと思う。けれども、あまりにも秩序のない、混沌の生活の背景を考えると、形の上で秩序をつくることは、この子どもたちには特別な意味があるのかもしれないと思ったりする。私は、ここではじめて子どもらしい姿に出会った。

ウダイチャル・スクールは、幼稚園と小学校から成っている。小学校は四年までである。学校の教室を見てまわったとき、どのクラスでも、子どもたちはいくつものグループに分れ、廊下にまで坐りこんで算数の問題を解いたりしている姿に驚いた。幼稚園で日本よりも形式を感じた私は、小学校ではより多くインフォーマルな教育を感じさせられた。

短期間の旅行者の印象なので、一面的かもしれないが、予期をこえた体験をいくつもしたので、その観点から記した次第である。

インドから日本に帰った翌日、二週間ぶりに私の学校の子どもたちに会ったとき、それぞれに動きがあることに目をみはった。各自が自信をもって自分の思うことを最後までやり通し、何かを表現している。表現すること自体、生命性が人々との相互のやりとりによって耕やされ、その結果が生み出された文化と言えるのではなかろうか。その意味で、保育は、ある社会の大人と子どもとの間で、幾世代にもわたってつくり上げる文化であると考えた。

（愛育養護学校）

× × × ×